

《書 評》

Takeyuki Tsuda, *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*, Columbia University Press, 2003.

村 井 忠 政

Tadamasa MURAI

Studies in Humanities and Cultures

No. 4

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 4号
2006年1月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
JANUARY 2006

《書 評》

Takeyuki Tsuda, *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*, Columbia University Press, 2003.

村 井 忠 政

はじめに

1990年の入管法改正以降急増したブラジル、ペルーなど南米からの日系人のいわゆる出稼ぎ現象が注目されるようになってから久しい。なかでも日系ブラジル人の移住者は、バブル経済が崩壊してわが国の景気の長期停滞が続くなかでも、相変わらずその数を減らすことなく増えつづけており、在日韓国朝鮮人などのオールドカマーが減少化傾向にあるのに対して、これらニューカマーの数は今後ますます増大することが予想される。また近年の傾向としては、初期に見られた単身で来日し数年で帰国する一時滞在的な出稼ぎではなく、家族をあげて来日し10年以上に及ぶ滞在をする者や、日本永住を決意して住宅を購入するケースなど、長期滞在ないし永住化の傾向が見られる。

ここで書評の対象として取り上げる本は、1980年代後半から始まったブラジルの日系人の日本への移住を扱ったもので、日系ブラジル人の祖国日本への移住が、彼らの社会経済的地位やエスニック・アイデンティティにいかなる影響を及ぼしているかを分析したものである。日系ブラジル人の日本への「還流型移住」(return migration)という現象は、今では海外の研究者にも注目されているらしく、近年日系ブラジル人の日本への移住を研究テーマとしたアメリカ人研究者の手になる英文の研究書が立て続けに刊行されている。評者の知るかぎりでも、日本最大のブラジル人集住都市である浜松市の日系ブラジル人を対象としたエスノグラフィーや (Roth 2002)、住民の約4割が日系人で占められる豊田市の保見団地の日系ブラジル人をとりあげたエスノグラフィーがあるが (Linger 2001)、これらはいずれもアメリカ合衆国の人類学者による研究である。日系ブラジル人研究には日本語とポルトガル語が話せなければならないという高い言語障壁があるにもかかわらず、かなりの数のアメリカ人研究者がこの研究テーマに飛びつくという現象が見られ、さらにはヨーロッパやオーストラリアの研究者たちも関心をもっているという (Tsuda 2003: xiii)。

著者について

本書の著者タケユキ・ツダは日系アメリカ人二世で、現在カリフォルニア大学サンディエゴ校

比較移民研究センター副所長の職にある。著者は1992年11月に、カリフォルニア大学バークレー校博士課程の大学院生として、本書の元になった博士学位請求論文のための調査の一環として、フィールドワークを実施するために日本を訪れている。本研究で著者が日本でのフィールドワークに際して用いた研究手法は、エスノグラフィー執筆のために多くの人類学者によって採用されてきた「参与観察」と呼ばれるものである。すなわち、日系ブラジル人の日本への出稼ぎを研究するために、著者自身が日系人出稼ぎ労働者として働きながら、工場の中でインフォーマントである労働者たちと人間関係をむすび、彼らとの人間的交流を通して彼らの行動、態度、内面を観察し、日系ブラジル人と日本人の双方にインタビューをすることで、外からの距離をおいた「客観的な」観察によっては得ることの出来ないより深いリアリティを探ろうとする試みである。著者がフィールドとして選んだ職場は、日系人の集住地域として知られる群馬県大泉町のエアコン製造工場であり、そこでは多くの日系ブラジル人や日本人社員が組み立てラインで働いており、著者は4ヶ月半にわたって派遣社員としてこの工場のラインの検査部門で働くことになる。

本書の構成と目次

次に本書の構成について説明すると、以下に見るように、全体は3部構成（第1部：マイノリティの地位、第2部：アイデンティティ、第3部：適応）で、序論と6章からなる本論、それに結論、エピローグからなっている。

PREFACE: The Japanese Brazilians as Immigrant Celebrities

ACKNOWLEDGMENTS

INTRODUCTION

Ethnicity and the Anthropologist: Negotiating Identities in the Field

PART 1. MINORITY STATUS

1. When Minorities Migrate

The Japanese Brazilians as Positive Minorities in Brazil and Their Return Migration to Japan

2. From Positive to Negative Minority

Ethnic Prejudice and "Discrimination" Toward the Japanese Brazilians in Japan

PART 2. IDENTITY

3. Migration and Deterritorialized Nationalism

The Ethnic Encounter with the Japanese and the Development of a Minority Counteridentity

4. Transnational Communities Without a Consciousness?

Transnational Connections, National Identities, and the Nation-State

PART 3. ADAPTATION

5. The Performance of Brazilian Counteridentities

Ethnic Resistance and the Japanese Nation-State

6. "Assimilation Blues"

Problems Among Assimilation-Oriented Japanese Brazilians

Conclusion

Ethnic Encounters in the Global Ecumene

Epilogue

Caste or Assimilation? The Future Minority Status and Ethnic Adaptation of the Japanese Brazilians in Japan

参与観察

本書のなかで評者の最も注目を引いた「参与観察」(participant observation)に関する記述が序論「エスニシティと人類学者」で展開されている。著者自身が間接雇用の日系人出稼ぎ労働者として工場で働きながら、同時に他方で観察者(人類学者=研究者)として日系ブラジル人や日本人従業員と関係を取り結び、社会的相互作用をもちながら、職場の人間関係を観察するというフィールドワークを遂行していく。日系アメリカ人二世である著者は全く日本人と変わらない外見を有し、英語のほかにポルトガル語と日本語を流暢に話すことが出来る。彼が大泉の工場で働き始めた時、彼の身分は派遣業者によって会社に送り込まれた間接雇用の日系ブラジル人労働者(すなわち非正規社員)であった。したがって、周囲の職場の同僚たちは彼をあくまで日系ブラジル人の出稼ぎとみなしていたし、彼自身もそのように振舞っていたのである。

このことは、著者が日系ブラジル人のあいだで受け入れられるには好都合であったが、日本人の正規社員からは無視ないし疎外されるという結果をもたらす。直接雇用の日本人正規社員と間接雇用の非正規社員である日系ブラジル人は、同じ工場の同じラインで作業をしており、しかも同じ町の同じアパートに住んでいながら、相互にほとんどかかわりを持たずとしないし、昼食時間や休憩時間にも、それぞれ別々の部屋や別々のテーブルに固まって座り、話をする(Tsuda 2003: 161)。このため著者は日本人労働者とのかかわりをもつことがきわめて困難になる。よきフィールドワーカーであるためには、インフォーマントとの積極的・能動的な相互作用が欠かせないと考える著者はかくしてジレンマに陥る(Tsuda 2003: 18)。

かかる事態を打開すべく、著者はある時点で意を決し職場の日本人に自分の「正体」を告白する。つまり彼が実は「日系ブラジル人」ではなく「日系アメリカ人」であること、しかも「出稼ぎ労働者」ではなくカリフォルニア大学バークレー校の「大学院生」で、日系ブラジル人に関する博士論文を書くための調査の一環としてこの工場で働いていることが明らかにされる。このカミングアウトに伴って、著者自身がきわめて複雑かつデリケートな立場に置かれることになった

ことはいうまでもない。つまり、彼は日系ブラジル人でもなく、そうかといって日本人でもないというマージナルな存在であり、その結果彼のアイデンティティはきわめて曖昧かつ不安定なものとならざるを得ない。そのため著者は人類学者＝研究者である自分とその研究対象となるインフォーマント（被調査者＝職場の同僚）との間で絶えずアイデンティティをめぐるネゴシエーションを行うことが必要になる。いわゆるマルチエスニックな状況下で「参与観察」に従事する研究者が置かれることになるアイデンティティをめぐる込み入った状況に関するこのあたりの記述は極めて興味深いものがある。

トランスナショナルな移住とエスニック・アイデンティティ

第1部では、日系ブラジル人の日本への還流型移住が、彼らのエスニック・マイノリティとしての社会的地位や日系人としてのエスニック・アイデンティティに、どのような影響を与えるかについての詳細な分析がなされている。トランスナショナルな移住が彼らのエスニシティやアイデンティティに与える影響を分析するためには、送り出し国ブラジルと受け入れ国日本の両方でのフィールドワークが必要になる。この分析のために著者は日本を訪れる前にブラジルのリオグランデ・ド・スル州とサン・パウロ州で8ヶ月半を費やし、70名の日系ブラジル人にインタビューを実施している（Tsuda 2003: 11）。

ブラジルの日系人は、その勤勉性、誠実さ、高学歴のゆえに概して社会経済的地位は高く、ブラジルのマイノリティ・グループのなかでは「ポジティブ・マイノリティ」として尊敬の的になっているという。ちなみに彼らブラジルの日系人は自らを「ニッポンジン」ないし「ジャポネース」と呼び、周囲の白人を中心とするマジョリティとしての非日系ブラジル人を「ガイジン」ないし「ブラジレイロ」（ブラジル人）と呼んでいるという奇妙な事実がある¹。それほど彼ら日系人は自らの日系人としての民族的アイデンティティに誇りと自尊心をもっているといえる²。

事実、わが国への初期の出稼ぎ労働者の中には本国ブラジルでは管理職や、教師、医師などの専門職に属する人が少なくなかった。ところが彼らが出稼ぎ労働者として日本を訪れ、いわゆる「ブローカー」と呼ばれる派遣業者（業務請負業者）に囲い込まれ、3K職場で不熟練労働者として働くことになると、ホワイトカラーからブルーカラーへと彼らの社会経済的地位は突如として下落し、日本人の外見をしているが本当の「ニホンジン」ではなく文化・習慣を異にする「ブラジル人＝ガイジン」として否定的な評価を受け、差別と偏見の対象となる。かくしてブラジルでは自らを「ニホンジン」とみなし、それに誇りを抱いていた日系ブラジル人は、皮肉なことに日本では「ガイジン」とみなされることになる。ここであるブラジル人大学院生の声を引用する

¹ 前山隆著、1982年、「ブラジルの日系人におけるアイデンティティの変遷」『ラテンアメリカ研究』No. 4。

² ブラジルにおける日系人のアイデンティティについては前山隆の次の研究が参考になる。前山隆著、2001年、『異文化接触とアイデンティティ—ブラジル社会と日系人—』御茶の水書房。

と「ぼくには日本人の血が流れているし、外見は日本人と変わりありませんが、日本に来て分かったことは、ぼくの心もぼくが身に付けている文化もブラジルのものであるということでした。つまり、ぼくのハードウェアは日本製ですが、ソフトウェアはブラジル製であるというわけです」(Tsuda 2003: 159)。

本書で著者は同じ職場で働く日本人従業員の目から見た日系人労働者に対する評価をいくつか紹介しているが、そのほとんどが否定的なものである。こうして日系ブラジル人の日本における社会的地位は「ポジティブ・マイノリティ」としてのそれから「ネガティブ・マイノリティ」としてのそれへと変遷を遂げることになる。このように日本社会で差別や偏見などのネガティブな経験をする中で、日系ブラジル人のアイデンティティにどのような変化が生じるかを分析するのが本書の主たる目的である。

著者は第3章「移住と脱領土化されたナショナリズム」において、このテーマを取り上げている。結論を先取りすると、日本社会でのネガティブな経験をした日系ブラジル人の多くは、ホスト社会である日本社会に受け入れられず周辺化(marginalization)された存在となる。日本への移住以前にもっていた日本とのエスニックなつながりから距離を置き、日本への移住後は日本文化へ同化することに抵抗を示し、逆にブラジル人としてのナショナリズム感情が強化され、自分がブラジル人であることを強く意識するようになるという。これを著者は「対抗アイデンティティ(counter identity)と名づける。日本へ還流型移住をした日系ブラジル人の中で見られるこの「対抗アイデンティティ」については、他の研究者によっても指摘されている(たとえばLinger 2001: 95-114 ; Roth 1999: chapter 4)。ここでわれわれの注目を引くのは、トランスナショナルな移住が、場合によっては、意図せざる結果として「脱領土化されたナショナリズム」(Deterritorialized nationalism)を生み出すことに寄与することがあるという事実である(Tsuda 2003: 47)。

日系ブラジル人の多くは日本への出稼ぎで単純労働に従事することになることを覚悟して心の準備はしてくるものの、現実にはそれを経験することにはショックが伴わざるを得ない。ある日系人女性は著者のインタビューに応じて次のようにそのときの気持ちを語っている。「日本に行けば工場で単純労働に従事しなければならないことは分かっています。私たちの社会的地位が下がることは知っていたし、お金を稼ぐためにはそれはやむを得ないこととして受け入れていました。それでもやはり、工場の作業服をはじめて身に付けて組み立てラインに並ぶと、本当に心が傷つくし、プライドにダメージを受けるんです」(Tsuda 2003: 172)。ブラジルにあって専門職や管理職、あるいは企業の経営者であった者にとって、この職業上の地位や誇りの喪失はとりわけつらい経験となるであろうことは容易に想像できる。

トランスナショナル・コミュニティとは何か

第4章では、日系ブラジル人の日本への移住によって生れる「トランスナショナル・コミュニティ」についての分析がなされる。トランスナショナル・コミュニティの存在については西インド諸島の移住の研究に従事しているアメリカの人類学者たちによって早くから指摘されているところであるが、日系ブラジル人移住者のトランスナショナル・コミュニティについての実証的な先行研究は評者の知るかぎり多くはない。その意味ではこの著書がこの領域に関する研究に一定の貢献をしていることは疑いないと思われる。

トランスナショナル・コミュニティの形成を可能にした物理的条件としては、なんと言っても輸送手段の発達とテレコミュニケーション・テクノロジーの驚異的な進歩をあげなければならない。日系ブラジル人は日本滞在中もブラジルの家族・親戚・友人等と手紙、国際電話、ファックス、インターネットなどで頻繁に接触を保ちつづける。彼らは「リピーター型移住者」と呼ばれ、ブラジルと日本の間を高速のジェット機で往来し、日本に永住しながらもブラジルとのつながりを断ち切ることがない。周知のように、このような形態の移住を社会学者や人類学者は「トランスナショナルな移住」(transnational migration)と名づけている。今後グローバル化が一層進展することによって、わが国においてもトランスナショナルな移住がますます盛んになることはまちがいあるまい。

対抗アイデンティティのパフォーマンス

第3章で取り上げられた日系ブラジル人の「対抗アイデンティティ」が具体的にどのような形をとって現われるかについての詳細な心理学的分析は第3部「適応」の第5章「ブラジル人の対抗アイデンティティの表出」において試みられている。ここでは社会的、心理的、文化的などさまざまなレベルでの対抗アイデンティティの表出の事例が紹介されている。ここでは群馬県大泉町で日系ブラジル人によるサンバ・パレードにまつわる興味深いエピソードを紹介しておこう。1991年から始まった大泉町のサンバ・パレードは、年々その参加者が増え、また観客も20万人を越すまでになった。ところがブラジルの日系人は普通サンバ・パレードには参加しないのだという。サンバ・パレードには「貧乏人の祭典」「裸」「暴力沙汰がつきもの」というイメージが強いので、中産階級を自認する日系人は参加してこなかったというのだ³。このような日系人たちが日本ではサンバを踊り始めたのには、まさに日系人の「対抗アイデンティティ」のパフォーマンスとしてとらえることが出来ると著者は分析している (Tsuda 2003: 283-286)。

³ 深沢正雪著、1999年、『パラレル・ワールド』潮出版社、186—187頁。

パッシングがもたらす心理的問題

第6章「同化の憂鬱」では、第3章で取り上げられた「対抗アイデンティティ」に見られたケースのように、ホスト社会日本に受け入れられないがゆえに、日本文化への同化を拒み、あえてブラジル文化との同一化を強調することで自己のアイデンティティを護ろうとする心理学的ストラテジーとは反対に、何とかして日本社会に受け入れてもらおうとして文化的同化を試みる少数の日系ブラジル人が経験する心理的問題を扱っている。日本社会に受け入れてもらおうとするあまり、本来の自己を押し殺して、無理やり「ニホンジン」になりきろうと試みる（これを「パッシング」と呼ぶ）ことで、これらの日系人は、仕事のうえでは日本社会にうまく適応したように見えるが、他面においてアイデンティティの拡散、心理的ストレスと不安、日系人仲間からの疎外、そして究極的には否定的な自己イメージの内面化などに悩まされることになる。サンパウロの精神科医師ナカガワは、日本での出稼ぎからブラジルへ帰ってきて彼のもとを訪れる日系人患者の多くは、日本語の読み書き能力が平均的な日系人よりはるかに優れていると述べている（Nakagawa: 1994）。

最後に、「エピローグ」において著者は日本における日系ブラジル人の日本社会への適応について将来展望を試みているが、意外なことにそれはかなり楽観的なものとなっている。とりわけ日系ブラジル人児童の日本社会への同化に関する著者の見解については、評者としては疑問があり全面的に同意することは差し控えたい。しかしながら、本書からわれわれが学ぶべきことが極めて多いことはいくら強調してもよいであろう。とりわけ著者自身が強調しているように、本書は日系ブラジル人の移住経験のエスノグラフィー（民族誌）にとどまらず、トランスナショナルな移住に伴って生じるさまざまな理論的問題、たとえばマイノリティの地位、民族的な偏見や差別、アイデンティティの変容、ナショナリズム、トランスナショナリズム、グローバリゼーションなどをめぐる争点に応えようとする試みでもある。グローバリゼーションやトランスナショナルな移住をめぐる多くの研究者の理論が本書では引用紹介されており、なかにはかなり難解な部分も含まれているため、これらの議論になじみのない読者にとっては読みにくい記述も少なからずあると思われる。いずれにせよ評者にとって本書はきわめて示唆に富んだ知見にあふれており、大いに啓発されたことは率直に認めたい。

引用文献

- Linger, Daniel Touro. 2001. *No One Home: Brazilian Selves Remade in Japan*, Stanford University Press.
- Nakagawa, Decio. 1994. "Dekasegui." Unpublished paper.
- Roth, Joshua Hotaka. 1999. *Defining Communities: The Nation, the Firm, the Neighborhood, and Japanese-Brazilian Migrants in Japan*. Ph.D. diss., Cornell University.
- Roth, Joshua Hotaka. 2002. *Brokered Homeland: Japanese Brazilian Migrants in Japan*, Cornell University Press.